

方言と共通語

方言と共通語

編集者は、〃「現代国語の国語学」というようなことであらゆる角度から現代語の諸相を探索してみたい〃と言われる。そこで、私は、与えられた題目「方言と標準語」を、「方言と共通語」という

ことにする。

「標準語」は、公的機関によって、国語の規範として設定されるべきものである。〃現代語の諸相〃というような見地では、「方言」に対しては、「標準語」よりも「共通語」がとり立てられてよい。「共通語」は、現実の国語界の中で、しぜん共通度を高めた、在

藤

原

与

(ふじわら・よいち)

るものだからである。(一) 事象でも、「共通語」と言われる。が、「方言」に対するものとして「共通語」を言う時は、語彙・文法・音韻の総合体を考えたのがよい。

方言は変わりつつある

今日、方言はひどく変わりつつある。うごきつつある。古来(旧米)の方言色は、日に日にあせてきている。(——さきでまた、ならんかの地方色がどのようにかできるとしても。) この動態が、今日の諸方言のすがたであると言つてよからう。

すでに、現在の老人層の人たちと、その前の世代の人たちとの間で、大きなうつりうごきがあった。そして、現在の老人層のことは、その全体としては、もはや、今日の若い者たちには受けつがれにくいものになっている。

方言の変動は、方言としての全一の変動、つまり方言生活の推移変動である。中のどんな要素がうごき、どんな要素がうごかぬかは別として、ともかく、全体像が変貌するのが方言の推移であり、変動である。

ふつう、方言は変わったという時、その方言総体の中の、それこれの、目ぼしい事象の推移変動が指摘される。

方言はたしかに変わってきた。その事実を指摘することが、じつに容易である。今は一つ、方言生活での、あいさつことは、それも、結婚式に招かれて行つてのあいさつことは、例としてあげてみよう。私に、昭和十年八月の調査資料がある。山陰・山陽の脊梁地帯を、縫うようにして東西にあるいた時の記録である。これから例をとつてみる。まず、京都府加佐郡河守上村字二俣の古老からは、つぎのような言いかた——あいさつことを聞いた。

○コンニチワ オヒガラニ ツイテ、オテマオ モライナサツテ、ワタシラガ ゴツツオーサンニ ナリマスジャゲナ。

※ 以下、文ヲセント造。

京都府天田郡上川口村の老女からは、つぎの言いかたを聞いた。

○コンニチワ オヒガラニ ツキマシテ、オテマオ モライウケナハツテ、ゴテネニ ヨンデ ヤロー オツチャツトクレナハツテ、オジギナシニ ヨバレテ アガリマシタ。

京都府天田郡上夜久野村の古老からは、つぎのような言いかたを聞いた。

○コンチワ ヨイ オテンキササンデ ゴザイマシテ。キキマスリヤー オヒガラニ ツキマシテ、マー ニギヤカニ シテリモライナサツテ、オメデトー ゴザス。ワタシラマデ ゴテネニ オマネキクダサツテ、オシヨーパンニ ヨバレテ マイリマシタ。

これらの実例を、よく見ていただきたい。読者各位の周囲の、結婚あいさつことばの実情は、今日、どうであろうか。おそらく、「お日がらについて」などの言いかたは、多くの土地の、若い人びとは、しなくなっているのではなからうか。「お手まを貰いうけなすて」とは、もはや言わなくなっているにちがいない。すでに民主社会の今日では、妻君はただの「お手ま」ではない。

たとえばあいさつの事象は、こうして変移しており、諸事象の変移によつて、けつきよく、方言は、大きな変貌を見せることになつた。

時世が変われば方言は変わる

時代の流れとともに、生活事情が変移していけば、方言はしぜん

に推移する。

時勢は人の心を変えてくかす。人の心がうごけば、方言は変わる。心がうごけば、また、生活が変わる。生活が変われば方言は変わる。

ここ三、四十年の日本の生活文化史は、じつに変動のはげしいものだった。そのはげしさに即応して、方言もそうとうにはげしく流動推移してきたようである。おおよその傾向としては、各方言が、しだいにその古来の方言色をうすくしてきたのだった。これは、反面から言うと、共通語の強い成長発展だった。諸方言は、成育する共通語によって、だんだん平均化されてきたのである。(対立性が弱められてきたのである)。

共通語の影響

外界からの、物の刺激があれば、方言は変貌する。物的生活は、いやおうなしに、方言を変えていく。それはそれとして、いったん、共通語がそうとう程度にできあがると、こんどは、共通語そのものが、地方語を変えていく。今日は、ラジオ・テレビなどのマス・コミのはたらきで、共通語そのものが、じかに、方言を大いに変貌させつつある。

語 通 共 と 言 方

共通語化の路線としては、おおよそ三つが考えられよう。「物」からの共通語化がその一つ。「共通語」そのものの刺激による共通語化がその一つ。それに、世代変化による、自然の共通語化がもう一つ考えられる。世代が変われば、たとえばおやの代から子の代になって、ことばはしぜん変わっている。外界からの物の刺激ということとはぬきにしても、世代推移による共通語化ということは、考えられよう。たとえば「行かんせ。」(行きなさい)という言いかたは、父老のものではあったが、もはや、今の若者一般のものではない。

方言によっては、「行かんせ。」は若い者が古老に言うのにふさわしいものになっている。「行かんせ。」をつかわなくなったのは、「んせ」ことばの語感が、もはや若人にはそぐわないものになったからではないか。語感上のことなどは、まず、外界からの、物の直接の刺激などはぬきにしても、言語生活総体内部での、その推移が考えられるのではないか。世代による、語感のうけとりかたのちがいによって、あることばは、若い世代にきらわれるようになり、したがって、そこで、共通語化の波は、一つ大きく打つことになる。(物の刺激によって、語感上の変動のおこることも、むろん多かるう)。

「共通語の影響」は、共通語の波打ちとも、比喩的に表現することができ。共通語の方向から考えれば、個々の方言は、今、共通語の波に、大いにゆすぶられていると見ることができ。方言によって、そのゆすぶられかたに差異がある。

共通語と諸方言

中国方言と概括しうるものは、出雲隠岐地方をしばらく除いて考えれば、だいたい、共通語にゆすぶられて、すぐにくく状態にある。いわば、当地人は、共通語の生活にはいること——共通語化——が容易と見られる。第一にアクセントが、当方言のは、いわゆる共通語のにくく近いからである。中部地方の諸方言下では、なおのこと、その人びとは、自己の方言生活から、共通語生活にはいつていくことが、容易である。東北弁は、文法的には、関東弁に近い(——遠いとは言えない)が、音韻上では、東北弁は共通語音韻に近い。ここに、東北人の、共通語への困難な道がある。近畿弁・四国弁の人たちも、共通語生活のためには、アクセントの、習得困難な道をのりこえなくてはならない。共通語への道がけわしいとい

うことは、共通語から言うと、その波でそれらの方言をゆすぶっても、それらの方言は、なかなかうごかぬ、ゆれぬということである。九州方言下でも、南方部となると、共通語の波をもつて強くゆすぶっても、その方言は、じつとしてうごかぬ態である。南島方言ともなれば、なおさらのことである。与論島の人たちの実感を聞いたところによると、ここなどには、「かごしま語」——地方共通語の波にゆすぶられても、なかなかうごかぬ方言状態があるようである。

ところで、たとえば、かごしま弁その他のように、共通語の波によつては、容易にゆるがされるべくもない異風の方言となると、共通語の波が来た時、波を波として受けて、その波をすっぽりとかぶる。ここに、在来の方言と新来の共通語との二重構造ができる。下部構造・上部構造の二重組織である。このようなわけで、方言色のこい所では、いわゆる共通語の、わりによく行きわたっている一面の状況が見られる。かごしまの人びとは、一方で、共通語をよく話す。(——ただ、文アクセントは、固有の「あと上がり調」を、なお出しやすいけれど。)

中国山陽地方のように、いわゆる共通語、全国共通語に近い様子の方言状態の所——方言色のうすい所——では、人びとの、共通語生活への意識は、かえって弱いということがある。このために、方言色は、消えそいで消えにくいことにもなっている。

方言変化の遅速

一般的に言って、方言の、方言色を失っていく過程には、方言による、いろいろの、質的相違があるはずである。自由に例をとつて言おう。北海道内諸方言が「共通語化」していく過程と、薩隅方言

のそれとは、ちがったものがある。方言の「共通語化」の、方言による遅速は、さまざまに考えられる。

北海道諸方言の全国共通語化は、たとえば、東北方言のそれよりも、早く進むか。(北海道方言の共通語化問題に關しては、昭和三十六年五月に、「北海道新聞」に掲載された、「北海道の方言と言語」の題下の、徳川宗賢・野元菊雄・上村幸雄三氏の好文章がある。)近畿四国弁といへば、共通語アクセントに対立するようなアクセントを持つ方言であるが、今は、四国内諸方言でも、その「共通語化」の、かなりいちじるしいものも見られてきている。おもに生活一般も、かなり、変動・浮動の觀を呈してきている。おもには、学校教育の力によるものであらう。学童たちは、その、方言の語アクセントを、さまざまに、——多く、無自覚的にも、——変転させてきている。こうなれば、さしもの四国弁の地も、だんだんに、共通語の強まる土地となるのであらう。共通語化は、ひまがかかるよう、で、案外、早いかもしれない。

共通語をつくる

「共通語」は、東京語本位のものが、それとして、ただしぜんに、全国的に、流布しているだけではない。さきの北海道でも、「北海道共通語」ということが言われている。地域は地域で、しぜんんに地域共通語を産むのである。小地域は小地域なりに、しぜんんの小共通語を、成り立たせている。これは、地域の集合力・凝集力によるものである。

こういう地域地域に、東京語本位の中央の共通語が、全国共通語として広まってくる時、地域は、その、地域の凝集力を支える地方性によつて、その中央の共通語に、変容をきたさしめる。地域

が、中央の共通語に対して、はたらきかける。このように、地域地域が、流布の中央の共通語に変容を加える点では、地方地方が、全国共通語をつくるとも言える。全国共通語は、東京語を発源としつつも、全国で、総合的に、しぜんにつくられるのだとも言える。

これは、地方の個人個人に即して言うとき、つぎのようになる。共通語は、地方人も、つくっていくべきものである。ただに受身で、中央からのものをまねてさえいけばよいというものではない。(じつさい、そうはしきれない。)積極的に、全国共通語の製作に参加するつもりになって、毎日、自分なりに、とおりのよいことをえらんで、共通語の意識でそれをつかっていくのが、地方人の立場であってよい。

東京語本位に、たとえばラジオやテレビで、全国共通語観(これは標準語観につながる。)による[ŋ]音が、地方に伝えられるとするか。この電波は、じじつ、毎日、全国へくり広げられている。しかし、国の西半地方内では、多くの人が、「わたしが」[pa]などをうけとりつつも、旧来の、自分の、「ワシガ」を、「ワタンガ」[ga]にすればよいのだと心得ている。こうして、[pa]はしぜん[ga]に変容されているのである。全国の妥協でしか、全国共通語はできやうがない。

地方地方の共通語意識が高まれば高まるほど、全国的な共通語製作運動は高まったことになる。

方言は存外変わらない

方言はほとんどん変わってきている。と見える反面、方言は存外かわらないものだと見るところがある。方言内の「方言」形

成要素に着目してみる時、ものによっては、かなり根づよいものがみとめられる。変わりやすい要素に対しては、不変的要素とも、かりに言つてよいものがある。変わっていくものに対して、変わらないうでとどまっているのが見られる。たとえば九州方言では、文末用の「バイ」や「タイ」は、なかなか変動しにくいもののようにある。一種の不変的要素とされようか。加賀、白山麓あたりの「ギラ」(わたしは)なども、他要素に対しては、判然とした不変的要素であるうか。——代名詞も、しばしば、こういう要素になりやすい。このような不変的要素、あるいは、ともかくも変わらないでとどまっているものが、方言全一の方言色を、かなり支えていることがある。こういう時は、方言は存外かわらないものだとされる。そういう要素・骨子が多ければ多いほど、その方言は、度のきつい方言、異風の方言とされる。九州方言などは、こういうわけで、今日も、特色のこい方言としてとどまっているものと見られる。その薩隅方言は、中でも、度のきつい方言である。中部地方東海道の方言などは、もはや、そうとうに、不変的要素などを陶汰していると見られよう。諸要素が多いうごいていけば、もはや、旧来の方言色は、温存のされようがない。全部の要素がうごいてしまえば、方言色はがらりと変わる。

この夏、天草下島に行った。その西南岸の一地例である。幼女

○アヨー。 あれまあ。

と言っていた。感嘆の特定表現法などもまた、一種の不変的な核となつていがちか。このものがすでに幼女にこう植えつけられている。このような幼女に、すでに、天草下島方言は、古風のままである。とも、一面、言える。(祖父母から幼孫への言語伝承も、この論

題である) 方言は、一面、変わりにくいものである。

むすび

むすびでの自由な発言として、一つ言いたいことがある。

「現代語の諸相」という時、一般には、現代語界の中の方言界は、どの程度にとらえられていようか。考えてみるのに、現代語量の中の方言量は、ずいぶん大きい。現代語認識の場合、方言界をどのようにとりあげれば、よく、現代語全体を正しく認識したことになるか。注意しなくてはならない点だと思ふ。方言への配慮が、どこかの狭い所でやっとなされたりするようでは、現代語認識もいぢるしく不完全である。方言もとりあつかうという「方言も」は改められなくてはならない。

方言のために方言を考えるべきことを、今、言うのではない。現代語のために、現代方言の世界を、正確に穩当に考え定めるべきことを言うのである。

— 広島大学助教授・文博 —

國文學 一月号 発売中

特集 世阿弥の総合探求

— 生誕六百年記念 —

世阿弥の芸術論	久松 潜一
中世文学史における世阿弥	安良岡康作
世阿弥と禅	香西 精
世阿弥と歌道	峯村 文人
世阿弥以前の猿楽	後藤 淑
表現から見た世阿弥能の特色	戸井田道三
世阿弥謡曲の鑑賞と分析	清田 弘
世阿弥能楽論の展開	斎藤 清衛
花伝書(風姿花伝)	金井 清光
花鏡	黒田 正男
観阿弥と世阿弥	安藤常次郎
世阿弥と元雅	米倉 利昭
世阿弥と音阿弥	西 一祥
世阿弥と禅竹	伊藤 正義
世阿弥研究回顧	野々村戒三
世阿弥を研究する人々のために	池田 広司
高校における能教材の扱い方	中村 格
世阿弥研究文献展望	西 一祥

◆ 定価二〇〇円・送料一八円